九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Changes of Serum Inflammatory Molecules and Their Relationships with Visual Function in Retinitis Pigmentosa

沖田, 絢子

https://hdl.handle.net/2324/4475024

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Copyright 2020 The Authors. This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.

（別紙様式２）

氏　　名	沖田　絢子
論　文　名	Changes of Serum Inflammatory Molecules and Their Relationships with Visual Function in Retinitis Pigmentosa
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　新納　宏昭 副　査　　九州大学　　教授　　中川　尚志 副　査　　九州大学　　教授　　今井　猛

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

網膜色素変性(RP)は遺伝性疾患であるが、その病態には炎症が関与することが知られている。申請者らは、本研究にて、RP 患者 45 名と年齢、性別の一致した健常者 28 名を対象に血清中の 15 種類のサイトカイン、9 種類のケモカインを multiplexed immunoarray (Q-Plex™)を用いて測定し、各マーカーの変化と中心視機能との関連を調べた。健常者と比較し、RP 患者の血清中において interleukin(IL)-8、regulated activation normal T-cell expressed and secreted (RANTES)の上昇を認めた(IL-8: $p<0.0001$; RANTES: $p<0.0001$)。RP 患者において、IL-8 は logMAR 視力と正の相関を($\rho=0.3596$, $p=0.0165$)、ハンフリー視野計 10-2 プログラムにおける中心 4 点平均感度($\rho=-0.3691$, $p=0.0291$)、中心 12 点平均感度($\rho=-0.3491$, $p=0.0398$)と負の相関を示した。これらの結果より、RP 患者において末梢での炎症反応答が亢進しており、血清 IL-8 の値は中心視機能と関連することが示唆された。

以上の成績はこの方面の研究に新たな知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。なお本論文は共著者 12 名であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。